The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞今井優著『古今風の起源と本質』
Author(s)	後藤, 昭雄
Citation	語文. 1987, 49, p. 59-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68771
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評・今井優著『古今風の起源と本質』

後藤昭雄

常套ではあるが、まず本書の目次をあげれば次の通りである。

前編　古今和歌集四季歌の作風
第一章　みやこの歌
第二章　大歌のながれ
第三章　帝徳
第四章　花鳥風月のはじめ
第五章　正月儀式
第六章　桜・山寺・吉野山
中篇　古今和歌集恋歌の作風
第一章　万葉集婚姻歌の基底
第二章　万葉集婚姻歌の基底―その二
第三章　古今集恋歌の基底
第四章　古今集恋歌の基底―その二
後編　死と生の儀礼
第一章　喪制・喪思想より見た万葉集挽歌の様式―古今集哀傷歌の前提
第二章　神楽・東歌の本性
第三章　幽玄の継承―源俊頼・藤原俊成の場合

限られた紙幅ではこれらの一つ一つについて紹介説明することは不可能である。七ページに亘る著者自らの「要旨」も付載されていることなので、それは省略する。

本書の方法的特色はどこにあるか。それは、個人を越えて、その個人を一定の行動様式に導いた律令格式とその具体的な表現である儀式を通して古今風の思想と感性とを導き出すことであるという。具体例についてみよう。

『古今集』巻頭の三首は、周知のごとく、

年の内に春は来にけりひととせを去年とや言はむ今年とや言はむ

袖ひちて結びし水の氷れるを春立つ今日の風や解くらむ

春霞立てるやいづこみ吉野の吉野の山に雪は降りつつ

であるが、著者は三首の主題をそれぞれ暦、氷、吉野と解する。一方、『貞観儀式』に見る元日の儀式は御暦奏、氷様腹赤の奏、吉野国栖の奏の順序で行われた。この順序は全く歌の主題と一致する。すなわち右の三首の歌題選定の必然性、また配列は儀式によって解

釈できるとする（一八四ページ）。この記述にはやや唐突の感を否めないが、これを敷延して、『古今集』の時代は儀式とこれより派生して豊富になった年中行事の思想によって自然の事象が意義づけられ再構成されたと述べられるとき、それは納得されるものとなってくる。

自然すなわち四季とともに、『古今集』の中心をなす恋歌についても、中篇第四章で分析が試みられている。ここで援用されるのは「令」の条文である。松田武夫氏による、恋歌は恋愛の進行過程に即して編集配列されているという構造分析を踏まえて、「戸令」の、日本思想大系『律令』でいえば、25・26・27・30条の婚姻に関する規定を例として分析を加え、『古今集』の恋歌が内包する人間の行動様式はこのような現実の規範にもとづくものであったことが説かれている。

『古今集』歌の基底として祭祀、神話などの古層が想定される点にも本書の特色を見ることができよう。十分な要約の余裕もないが、

見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

の歌は、ことに都会的であり、かつ漢詩文の発想の影響が想定されるものであるが、本書はこの歌の古層に竜田姫祭祀があることを指摘する（前篇第一章）。また、『万葉集』作者未詳歌巻の相聞歌と『古今集』読人しらずの恋歌とを連接するものとして捉え、これらをスサノヲの神話にもとづいて制作された歌と解釈するユニークな視点も提示されている（中篇第一・第二・第三章）。

古層ということでいえば、『古今集』歌の文体の特徴である対立、対比、対応等を二元対比として捉えて、多くの用例の分析を通して、『古今集』がこの方法を自覚的に積極的に摂取して和歌の文体を形成していることを指摘し、この方法が、『万葉集』ではそこから脱却しようとしていた古代歌謡の技法であること、すなわち『古今集』が『万葉集』ではなく、そのさらに以前の古代歌謡の方法を継承することが説かれている（前篇第二章）。

本書の叙述の方法については、評者の立場からは若干の不満を持たざるをえない。本書は、評者の目から見ると、はなはだ饒舌である。もちろんそれは著者の主張を読者に納得させるのを助長しているという効果もあるのであろうが、他方においては、論文としての緊張を緩め、散漫という感じを懐かせてしまっているのではなかろうか。またそれは、途中で話しが枝葉の方へ逸れていく場合が見られる、あるいは一章一章が緊密な構成に欠けているといった点があることにもよろう。正直なところ本書を読み進めながら、さて本章の主題は何であったのかと目次を改めて見直したことも一再ではなかった。ただし、このような評者からする不満も、おそらく論文というものについての著者と評者との考え方の違いによるものであろうという気がする。

なお、誤植が散見することも残念である。また瑕瑾であるが、評者が気づいた誤りの一つ二つ。『新撰万葉集』序の「見説」を「見るならく」と読んで、他本では「聞説」、「聞くならく」とあることを注意するが（一三四ページ）、「見説」は「いふならく」と読み、「人がいうのを聞くと……ということだ」の意。つまり「聞説」と同義である。「源弘年」（二二五ページ）は「源弘」の誤り。

昭和六十一年八月、和泉書院刊。四五二ページ。定価一二、五〇〇円。

—本学助教授—